

野田の低地と台地

(のだのていちとだいち)



市内全域航空写真（野田ライオンズクラブ寄贈）

この写真は上空から見た野田市とその周辺です。利根川、江戸川といった大きな河川と利根運河が市の輪郭を縁取っているのがわかります。また、市は水田の多い低地と市街地の多い台地からなることも見て取れます。それでは、これらの川や低地や台地は昔はどのような姿だったのでしょうか。

図は約千年前の関東地方の河川の位置です。明治～大正時代に地理や歴史の分野で広く活躍した吉田東伍博士が描いたものを参考にしています。現在とは違って市の西側に利根川や渡良瀬川に関連する流れがあったようです。これらの流路は中世以降、人の手によって現在の流れに徐々に改修されてきたのです。この図では野田市北西部には、霞ヶ浦の南側に広がっていた香取海(かとりのおうみ)に流れ込む川(廣河ひろかわ)が示されています。廣河はそれほど長い川ではなく、市の北どなりの茨城県境町や古河市の沼や小さな谷を源流としていました。野田市側からは廣河に向かっていくつかの小さな谷がのびています。台地が侵食されてできたこの谷には、約七千年前には一時的に海が入り込んでいたことがこれまでの研究でわかっています。その後、海岸が現在のように東に移り、それらの谷は沼や湿地になり、その土地の多くは水田として現在利用されています。

一方、そこより数メートル高い台地はどうだったのでしょうか。台地の表層には厚さ数メートルの赤土(関東ローム層)がみとめられます。これは富士山や箱根などの火山灰や大陸からのちり(黄砂)が降り積もったもので、数万年という時間をかけて主に陸上で堆積したものと考えられます。陸上であったという意味では現在とはそれほど違った環境ではなかったようです。

ところで、図を見ると、野田市より西側の河川は東京湾へ、東側の河川は直接太平洋へ流れていることがわかります。このような、少し大げさに言えば関東平野の中の分水嶺(ぶんすいれい)は、南は船橋付近から北は宇都宮の先まで続いていて、野田市の台地はその長い分水嶺の中間部に位置すると言えそうです。

詳しくは...

- * 杉原重夫他 2002「千葉県野田市木野崎低地における過去 30500 年間の古環境変遷」『野田市史研究』第 13 号 野田市
- * 吉田東伍 1910「利根治水論考」日本歴史地理学会(1988 年に影印本として叢書房から再出版されている)

図 約千年前の関東東部の河川

「利根治水論考(吉田東伍.1910年)」付図と衛星画像をもとに作成。地名の漢字、海岸線や利根川下流域の河道の位置については今後さらに詳しく復元する必要がある

